

Title	安平哲二 社会主義経済理論の展開
Sub Title	
Author	気賀, 健三
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1954
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.47, No.7 (1954. 7) ,p.766(64)- 768(66)
JaLC DOI	10.14991/001.19540701-0064
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19540701-0064

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

時の雇備率(或いは労働者の就業率)は大體一定であつたとのべる。しかし我々は、マーシャルが、ピグーの如く雇備率の變化を考慮しては、思われない。尙こゝでピグーが、その著「ケインズの一般理論」で、現金残高式の $s = \frac{p}{p_0}$ から、「マーシャルの流動函数」 $M = I + (i - i_0)$ を想定したことを思い出す。第五章では、效用の問題が取扱われる。厚生經濟學の立場から效用の比較計量の可否が探究される。功利主義的厚生經濟學は、個人間の效用の比較計量の可能性を主張する。最近ではアームストロング、ケネディによつて究明されようとした。こゝにおけるピグーの論證は、やゝ明確を缺く。マーシャルの消費者餘剰の分析から計量可能性をとく。しかし他方マーシャルも述べている如く個人の效用は、貨幣額と同時に、個人の心理状態と重要な關係がある。こゝから平均人を取り出してそれと相對的比較の中に個人間の效用を計量しようとする。否計量が可能だと考へられている。貨幣所得と個人的心理からなる相對的實質所得の分析的試みはなされてない。更に個人の效用と社會的厚生との關係が重要なものとなつてくる。しかし社會的價值判斷については、こゝではのべられていない。第六節は、社會主義について。マーシャルが現在生存していたならば、どのやうに考へたろうか。マーシャルの社會主義についての見解は、彼の論文「經濟的騎士道の社會的可能性」の中心がうかがわれる。ピグーは、英國の現状を説明するに、マーシャルの如上の論文から引用したり想定したりするわけである。ピグーは、社會主義政策の遂行による資本蓄積への重壓、經濟的エネルギーの不活潑を指摘する。もつとも一部の企業(例えば郵便、鐵道等)の國家規整による優秀性は認める。しかしこゝで我々が注意しなければならぬのは、先きのべたマーシャルの論文である。彼はこゝで企業の大規模化、ピュロクラシーへの傾向

を見抜くと共に、それらの企業に働く人々が、金錢を自己體よりも成敗と名譽を重んずることをのべている。そして更に健全な企業家精神として社會的意義心を要求している。利潤動機のみが、經濟的エネルギーの源泉の凡てではない。以上本書の各節について簡単にのべてきた。マーシャルの理論は、既に教科書的に單純化され、因襲化されている。今日マーシャルをして生存せしめたならば、どのような見解をもつてあるうか。我々が、ピグーに望むところのものは、所謂「眞のマーシャル」「偉大な經濟學者マーシャル」その人を畫いてくれることではなかつたらうか。

(A. C. Pigou; Alfred Marshall & Current Thought, 1953. pp. 85) (山部 徳雄)

安平 哲二

「社會主義經濟理論の展開」

東京都立大學教授安平哲二氏の新著は、社會主義經濟體制下における經濟計算論の諸問題を正面からとりあげ、かつソヴェットにおける多數の學者のこの方面に關する研究文獻をたんに追跡している點において注目すべき力作と思われ。周知の如く、生産手段の所有と處分が國家の獨占的支配下にある經濟體制の下において、資源の合理的配分を(場所的ならびに時間的に)規定する規準は何であるかといふことは、現代の經濟理論上の一つの興味ある問題であつた。それは社會主義經濟が合理的に可能であるかどうかといふ純理論的興味に加えて、ソヴェット經濟の現實に對する解釋と批判或いはまた資本主義對社會主義という兩體制の經濟的能率の比較といふ政治的興味が重なつて、實踐的にもなんらかの實りを期待される問

題なのである。

著者は第一編において自由制社會主義の經濟計算論を紹介し、これに對するイギリスの準マルクスの經濟學者ドッグの經濟計算論と對比させる。著者の指摘する通り、ドッグの立場はソヴェットのな經濟體制を元にした經濟計算論であつて、前者すなわちラング流の經濟計算論の純理論的性格に比較して、一そう現實的具體性がある。その最も顯著の特長の一つはラング流の消費者優先の原理を否定して投資の政治的計畫を承認し、それによつて市場經濟にみられる景氣變動や市場均衡の一般的不安定性、利子率と利潤率による制約を超える國民經濟の運営の可能性を指摘していることである。

しかしながら、それならば投資の計畫化の根據は何であるか。利子率と利潤率の制約を超える經濟計算の合理性は何であるか。この答えは容易にドッグから引出すことができない。政治的なプライオリティ・リストというだけでは答えにならない。少なくとも經濟技術的に資源配分の選擇を決定する基準が與えられなければならないからである。

この問題は今日のソヴェットの政治家と經濟學者とを悩ましてゐる。現在のソ連の體制下においては市場的に成立する利潤率はないし、利子は殆ど全く無視されている。年々の政府の建設投資は無償還、無利子の原則で個々の産業と企業に分配される慣行である。したがつて用途の選擇に必要な全體的費用比較(代替的用途の意味の費用)を缺いてゐる。このような缺陷はたとえば、ソ連政府の五ヶ年計畫における重工業建設や個々の企業建設における資本の浪費に端的に現われていると察せられる。もとより資本財生産の重視はこの國の政府の意圖に出ずるものには相違ないが、一應それを受けいれるとしても、技術的な意味の費用計算の障礙は計畫を恣意的にし、したがつて浪費

書評及び紹介

と節約の基準を曖昧にしてしまふのである。ソ連の經濟學者が投資の選擇においていかにしてその効率を測定するかに苦心するものもけだし當然であらう。

この書において著者が最も力を入れた部分もこの問題にあると思われ。第二編は前半においてソヴェット學界における價值、貨幣および價格の理論に關する一般的傾向を概説し、後半において資本効率の測定と投資選擇に關する現下の學説を紹介している。著者の祖上にのせられた學者はストルーミリン、ムステイラウスキー、チエルノモルジクをはじめとしてなほ幾人かの學者の名をあげることが出来る。これらの學者の一つ一つの特長をここに紹介する餘地はないが、そのいずれもが現在ソ連の慣行となつてゐる固定資本回収期間比較による判定の方法に不満をもちながら労働費用の概念の中に一方において労働價值を計算單位としながら他方において資本の時間的要素をとりいれなくてはならないこと、資本の減價と銷却の費用を考慮すべきこと、他の用途への轉用の效用を考慮すべきことを説いているのは興味がある。しかし、注意を國民經濟全體の立場から眺めれば、このような技術的計算は資本の總供給量と投資機會の關係より生ずる投資の基準に少しも貢獻し得ないため、極めて限られた妥當性しかもち得ないものであることは明かである。いづれにしても、ソ連學者の提案は現在の段階においては實際に行われてゐる五ヶ年計畫や年次計畫の作成において有用な貢獻をなしてゐるとはいへない状態にある。

著者はこれらの多數の學者の見解とそれに對する外國の學者ベレトーム、ドッグ、キャプラン等の批判的見解を忠實に紹介することに努力を拂い、著者自身の見解を忠實に紹介することをむしる差控えている。筆者の讀後感を一言附加するならば、投資効率の問題においても、價值と價格に關するこの國の理論と同じよ

うに、マルクスのイデオロギーと労働價值法則は一つのやつか
いな旅券であつて、旅行の眞實な目的のために有効な役割を
果しているとは認めがたい。著者は最後に、ソヴェートの理論
が近代理論とも古典的マルクス理論とも異なり、ソヴェートの
現段階に即應してマルクス理論を改訂しつつ體系化することに
獨創的な展開を示しつつあると結んでゐる。(昭和廿七年十二
月、A五判三一頁 三八〇圓 文京書院刊) (氣賀 氣三)

W・G・バーチェット著

山田坂仁・小川修譯

「纏足を解いた中國」

「中國、それは眠れる獅子である」。十九世紀初頭、西歐資
本主義の影響がインドを通じて東洋に及ぼうとした當時、しば
しば西歐の知識人の話題となつたのは中國についてであつた。
かつてマルコ・ポーロによつて紹介されたこの神祕の大陸、底
知れぬ深さをもち無限の資源を蔵しながらも、封建的な社會制
度のもとに安逸の夢をむさぼる清國についてであつた。だが滿
洲人の支配するこの國は、當時すでにその内部に幾多の矛盾を
はらみ、いわゆる内憂外患とももも來つてその封建制度をゆる
ぶようになつてゐた。この意味で一八四〇年のアヘン戦争は
中國にとつては實に大事件であつた。毛澤東もこのべてゐるよ
うに、中國の社會が封建的社會から半植民地的半封建的社會に
わりはじめたのはこのアヘン戦争からであつて、中國人民の苦
悶はこの時から全く新たなものとなつたのである。
それから十年、洪秀全による太平天國の亂はキリスト教的な
色彩をおび、農民一揆的な性格をとどめてはいたけれども、と
にかくそれは滿洲族の支配をくつがえし、イギリス資本と結ん

で次第に買辦化する封建勢力に抵抗した一大民族運動であつ
て、中國人民にも彼等の敵が外國資本とこれに結びつく封建的
支配者であることがほゞわかりかけて來たのであつた。しかも
外國の帝國主義勢力の前には、あまりにも無力で卑屈な支配者
たちが、一度民衆の前に立つては威風凛々になることでは、われ
われの祖國日本の支配者もかつての中國に劣らないが、とりわ
け中國ではひどかつた。一九〇〇年の義和團事件は、このよう
な賣國的な支配階級に對する中國民衆のはげしい怒りといきど
おりの結果であつたのだ。

かくしてついに一九一一年十月孫文による清朝の打倒、いわ
ゆる辛亥革命がおこり、一九一二年中華民國が成立したのだ
が、この革命はいわば實を結ばぬ「あだ花」と化する運命にあ
つたことは云うまでもない。なぜなら革命の主體となつたもの
は廣汎な大衆層と少數のインテリゲンチヤと民族資本家では
あつたが、しかし實權をにぎつてこの革命の成果を強引に自己
の手中におさめたものこそ、ほかならぬ袁世凱を中心とする大
小の軍閥、しかも帝國主義列強と結ぶ軍閥であつたからであ
る。封建的な「きずな」をたちきつて自由な近國家を夢見た中
國のインテリゲンチヤにとつてこれほどゆううつなことがあ
るだろうか。だがそれだけではない。一九一五年、第一次大戦
のどさくさにまぎれて、二十一年條の侵略的な要求をつきつけ
た帝國主義日本の態度は、かつて見ぬいきどおりをもつて迎え
られたのであつて、このようにして一九一九年五月四日有名な
五・四運動が勃發したのである。そしてあらゆる封建勢力と帝
國主義勢力に反抗して立ち立つたこれらの青年たちの心のうち
には、すでにロシア革命の影響をうけてマルクス主義が根強く
芽生えつゝあつたことも忘れてはならない。ふたたび毛澤東の

言葉をかきりならは、「一九一九年は中國の民主主義革命が舊
い民主主義革命から新しい民主主義革命に轉化した轉換點」で
あつた。そして五・四運動の影響がその歴史的な意味が
學生やインテリはもちろん労働者や一般大衆の間に理解され
るとき、中國人民の任務は「内戦をなくし、軍閥をたおし、國內
平和を確立すること、國際帝國主義の壓迫をくつがえし、中華
民族の完全獨立を達成すること、中國を統一して、ほんとうの
民主共和國にすること」を目標として一九二一年七月、上海に
おいて中國共産黨が成立したのである。だがその後一九二七年
四月蔣介石の國民黨軍は、上海において革命の同盟者共産黨員
を虐殺し、クーデターを行つてからは中國は益々反動化の方向
をたどつた。魯迅の作品に見られる徹底したレアリズム、たと
えようもないゆううつさ、弱者の悲哀は、半植民地中國の良心
的なインテリの苦惱を、如實にそして教訓的に物語つてくれよ
う。

(1) 竹内好氏他、中國革命の思想、五八頁。

(2) 胡喬木、中國共産黨の三十年、邦譯一四頁。

さて大分前置きが長くなつたが、このように中國の歴史と社
會に宿命的であるかのように見える封建的な「きずな」、いや
日本をもふくめてアジア的といわれる地域に、あたかも網の目
の如くに存在する封建遺制、進歩に反對し革命を反革命におし
もどして孫文を憤死させ魯迅を絶望させたこのものは、一體何
であるか。新しい中國は一體どのようにしてこれを克服しつ
ゝあるか。バーチェットはこの點についてくわしくふれてゐる。

ウィルフレッド・バーチェットは、オーストラリア出身の新
聞記者で、第二次世界大戦中は米英軍に従つて各地を轉々とし
て「人民民主主義の國々」や「巨濟島」などを書いてゐるが、

書評及び紹介

とくに外人としていち早く原爆都市廣島をおとずれて、「ノー
・モア・ピロシマ」を發した最初の人であることは餘りにも有
名である。それにつけてもわれわれは、歐米人で中國問題につ
いてのすぐれた研究家が多いことを知つておどろかざるを得な
い。「中國の赤い星」のエドガー・スノーやオーエン・ラティ
モアは云うに及ばず、ジャック・ベルデンや「中國の家族と社
會」の著者として有名なオルガ・ラング女史、また「偉大なる
道——朱徳の生涯——」を書き残してロンドンで客死したアメ
リカのジャーナリスト、アグネス・スメドレー女史としてつね
に中國民衆のよき理解者であり味方であつたパール・バック女
史などは、われわれが深く頭を下げなければならぬ人々ではな
いだろうか。イギリスの經濟學を學び、フランス文學を語リド
イツの哲學を論ずるわれわれは、偉大な隣國、中國について果し
てどれだけのことを知つてゐるであろうか。われわれは、將來
はともかく今迄に、ひとりのスノーも、ひとりのラティモアも
いわんやひとりのスメドレーをももたなつたことを、アジア人
として心から恥づかしく思うものである。

ともあれバーチェットのこの書には新聞記者としての豊富な
體験と見聞にもとづいて、一九三二年の中日戦争から一九四九
年十月の中華人民共和國の成立を経て、朝鮮戦争勃發前後にい
たるまでの中國民衆の、革命の苦難と建設のよろこびとが、る
ゝとして書きつづらるゝ。アヘンに毒され、或は纏足で歩け
なかつた中國人民が、どのようにして立ち上つたか。名もない
田夫村娘が革命の實踐と行動とを通じていかに悩み苦しみをし
てついに歡喜に到達することができたか。われわれはこれを読
みつて新たな感激にひたることができよう。そして中國民衆
の苦惱と歡喜とは、實に中國だけのものではない、近代の意